

## 環境ミュージアム賞：「時を超えて」 大塚 菜々

コロナ禍の夏、ふと立ち寄った本屋で見かけたのは星新一さんの「妖精配給会社」だった。今風なシンプルな表紙にリニューアルされたその本を私は迷うことなく手に取った。

初めてその本を読んだ日のことを私は今でも鮮明に覚えている。もう半世紀近くも前の出来事だというのに。

ある病院の待合室で偶然手にしたその本を初めて読んだ時の衝撃！なんてすごい才能なんだろう。こんなに不思議で、こんなに不条理で、こんなに面白い話が、こんなに短いストーリーで、次から次へと私に迫ってくる。

星さんが描く世界は、近未来のお話が多い。当時中学生だった私にとって二十一世紀は車が空を飛び、鉄腕アトムのような人型ロボットが活躍するステレオタイプな「夢の世界」でしかなかった。

あっという間に年をとり、あんなに遠くに思っていた二十一世紀はあっさりとやってきた。今の時代、子どもの頃の私の想像を超えて進化したものはたくさんあるけれど。未だに車は空を飛ばないし、鉄腕アトムも存在しない。宇宙人との出会いもない。

けれども、「妖精配給会社」の中にあるちょっとずるくて弱くてブラックな「人間の姿」は変わらない。時を経ても色あせない。何歳になっても、何回読んでも、結末を知っていても、ドキドキする。わくわくする。

そのユーモラスな文章の根底にあるのは、人間の身勝手さが、私たちの大切な星を壊していくということへの警鐘でもあるのだろう。今まさにコロナ禍であり、次々と起こる自然災害も私たちに大きな課題をつきつけている。

現実的なのに非現実の世界を描く不思議な物語。その皮肉な結末が語りかけるメッセージは、楽しいけれど重い。大人になって読み返した「妖精配給会社」は、時を超えてまた新しい未来へと連れて行ってくれる気がした。